

(別紙)

成果の説明書

(氏名) 西野寿章	(学部) 地域政策学部
<p>1 重要事項</p> <p>【研究成果】</p> <p>(1) 図書(執筆分担)</p> <p>1) 高崎経済大学地域科学研究所編(2022)『地方製造業の躍動』, 日本経済評論社. (担当箇所: 第1章 高崎市製造業の現況と特性, pp. 1-18, 第6章 オリヒロ株式会社, pp. 133-147)</p> <p>(2) その他</p> <p>1) 西野寿章(2021) 書評・筒井伸一編著『田園回帰』ナカニシヤ出版, 地理学評論A94(7), pp. 271-272.</p> <p>2) 西野寿章(2022) 書評・岡橋秀典著『農村地理学』古今書院, 奈良大地理 28, pp. 93-95.</p> <p>(3) 研究報告</p> <p>1) 「日本地域電化史にみられる地域ガバナンス, エネルギーコミュニティと現代的応用への検討—戦前, 戦後の内発的な地域電化から—」, アフリカの再エネ研究会(代表・兵庫県公立大学法人芸術文化観光専門職大学・西崎伸子教授), 2021年11月29日(オンライン).</p> <p>【学外研究費獲得状況】</p> <p>1) 科学研究費基盤研究(B)「現代山村のレジリエンス」(平成30~33年度, 研究代表者・奈良大学文学部・岡橋秀典教授).</p> <p>2) 科学研究費基盤研究(B)「集团的林野経営の地域的機能分析と地域振興政策への応用可能性に関する研究」(平成30~32年度, 研究代表者・明治大学商学部・中川秀一教授).</p> <p>3) 科学研究費基盤研究(B)「地域内発力の成立基盤に関する地理学的研究」(令和3~5年度, 研究代表者・明治大学商学部・中川秀一教授).</p> <p>【教育成果】</p> <p>【学部演習】 2020年度は新型コロナウイルス感染拡大のため, 毎年実施してきた宿泊を伴った地域調査研究ができなくなったことから, 町内会によっては山間集落同様の限界化の進んでいる高崎市中心市街地の実態調査を行った. 2021年度は, 2020年度のゼミ研究と対を成して, 群馬県で最も限界化の進んでいる神流町の山間集落の実態調査を計画した. しかし, 2021年8月からの感染者急増に伴い宿泊を伴う地域調査研究を断念し, 町役場からの提供データの分析を行いつつ, 11月にはオンラインによる区長ヒアリング, 12月と3月に後援会バスを利用しての日帰り調査を行った. 西野ゼミでは, 毎年, 研究報告書をまとめてきたが, 新型コロナの影響もあり, 2022年度に2020年度研究と2021年度研究を合わせた西野ゼミナール最終研究報告書(通号29号)をまとめる予定である.</p> <p>【大学院】 博士課程2名在籍. 博士論文の作成に向けて, 適宜指導を行った. 2名とも, 研究成果を学会誌等に年度内に投稿して, 審査結果待ちの状況となっている.</p> <p>【社会的活動】 2021年度に学外で担当した公表可能な委員, 社会的活動は次の通りである.</p> <p>【学会関係】 群馬地理学会顧問, 東京地学協会, 経済地理学会の委員など</p> <p>【行政関係】 1) 群馬県ぐんま緑の県民税評価検証委員会委員長, 2) 群馬県公共事業再評価委員会委員, 3) 群馬県森林・緑整備基金評議員, 4) 群馬県埋蔵文化財調査事業団評議員, 5) 高崎市市有林管理委員会副委員長, 6) 高崎市・信越本線活性化協議会委員, 7) 群馬県過疎有識者会議座長, 8) 国土交通省利根川ダム管理事務所・菌原ダム水源地域ビジョン推進協議会アドバイザー</p>	

2 その他の事項

- ・2021年度は、地域科学研究所長としての職務上の研究も含め、多岐に亘る研究業績を積み上げることができた。2022年度は、コロナ感染拡大による現地調査が困難なことから、山村地域のレジリエンスを探る科研費研究(研究代表者・奈良大学文学部・岡橋秀典教授)に関連したアンケートを高崎市倉渕町の有機農業グループと群馬県上野村の協力を得て実施して、研究を進めた。その成果は科研費研究報告書として、2023年度以降に刊行の予定となっている。
- ・科研費研究「集团的林野経営の地域的機能分析と地域振興政策への応用可能性に関する研究」(研究代表者・明治大学商学部・中川秀一教授)についても、兵庫県宍粟市の生産森林組合の協力を得て、現代における入会林野認識に関するアンケートを組合員世帯に実施させていただいた。この研究は、科研費研究「地域内発力の成立基盤に関する地理学的研究」(研究代表者・明治大学商学部・中川秀一教授)にも関連し、2022年度中に成果を公表する予定となっている。

3 次年度以降の計画・抱負

【研究】

- ・本学には1988年4月から奉職し、2023年3月末で定年を迎える。これまで4冊の単著を公刊して、自らの研究をまとめてきた。この点で研究者としてのミッションを果たしたつもりではあるが、科研費研究3本については、順次、研究成果をまとめたい。
- ・科学研究費研究「山村のレジリエンス」は2021年度で終了し、2023年度の公刊をめざして研究成果論文の提出が求められており、これについては6月末までに脱稿の予定である。
- ・科学研究費研究「集团的林野経営の地域的機能分析と地域振興政策への応用可能性に関する研究」の研究期間が1年間延長されたことから、2021年度に実施したアンケート結果をふまえ、研究成果を8月末までにまとめ、「産業研究」に投稿の予定である。
- ・地域科学研究所の高崎中心市街地研究プロジェクト(代表・経済学部・阿部圭司教授)も今年度は研究成果をまとめる年度となっている。地方都市の旧城下町で発現している地域現象をどのように理解するのかについて考えたい。
- ・地域科学研究所ブックレットに「高崎の染色業」を染工場の関係者、研究者と共著で寄稿することになっている。京都で盛んであった紅板縮という染技術を用いて、長襦袢を染め上げる染色業が戦前の高崎市にも存在していた。なぜ、高崎に紅板縮による染色業が定着したのか、追求してみたい。
- ・2019年度からメンバーに加えていただいた京都大学再生可能エネルギー経済学講座(代表・諸富徹・経済学研究科教授)では、幅広い視点からエネルギー問題を考える機会を与えていただき感謝している。この講座で学んできたことを、上述の研究に反映させたいと考えている。

【教育】

- ・1991年度に経済学部で西野ゼミナールがオープンして、経済学部6期、地域政策学部24期、計30期のゼミの歴史を積んできた。新型コロナウイルスの感染が始まった2020年度はゼミもオンラインとなり活動の制約を受けたことから報告書の刊行を断念したが、2022年度に2020年度と2021年度の3年生の地域研究成果を1冊にまとめて、仮称『地方のマチとムラの変貌-政治経済のグローバリゼーションと地域-』として刊行の予定である。
- ・31年にわたるゼミナール活動において、彼らを教えていたつもりが、実は彼らから教えられてきた自分のいることに気づく。残念なことに、教師より早く逝ってしまったゼミ生が3名もいるのは残念なことではあるが、多くの学生諸君との交流が自分を育ててくれたことに感謝したい。最後の研究成果報告書は、そうした思いを大切に、まとめたいと考えている。
- ・群馬県をはじめとして、多くの公的機関の委員を務める機会に恵まれたことにも感謝したい。とりわけ群馬県の過疎政策担当者、林業専門技師の方々からは、多くのことを教わってきた。退職の年にあたり、政策立案など、ご恩に報いたいと思っている。